

クランタンの二つの農村 ——町に近いむらと遠いむらとの比較——

坪 内 良 博*

Two Villages in Kelantan

——Peasant's Life in a Near Town and a Remote Villages——

by

Yoshihiro Tsubouchi

は じ め に

本稿は1970年10月より1971年9月に至る1年間、西マレーシア東海岸クランタン州において筆者が行なった農村調査の第7報である。¹⁾ この調査における主な調査地はクランタン川左岸の河岸段丘上の天水田、ゴム園の混在地域に位置する146世帯からなるマレー人集落 Galok であった(本稿ではGと略記する)。Galok は郡役所所在地のバシルマスから9マイルほど離れており、バシルマスとタナメラを結ぶ定期バス、乗合タクシーなどがこの集落を通過するとは言え、町との間に日常的な交渉は少ない。本稿では町から $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ マイル離れたところに位置する他の集落 Kubang Bemban (本稿ではKBと略記する)²⁾ との対照を通じて、マレー人農村の変容の方向をさぐると同時に、異なった条件下においても共通に認められる側面にも注目す

* 京都大学東南アジア研究センター

1) この調査は京都大学東南アジア研究センターとマラヤ大学経済経営学部によるマレーシア農村調査計画の一部として行なわれた。この調査計画はマレーシアの稲作農村の比較を目的として、社会科学系と自然科学系の研究者の協力によって行なわれた総合的なもので、調査地としてケダー州、クランタン州、マラッカ州の農村が選ばれた。総合的な報告がいずれ発表される予定である。本稿の作成に関して、竜谷大学教授口羽益生、京都大学東南アジア研究センター助手前田成文の各氏からいろいろと貴重な助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

クランタン州に関する筆者の既発表の報告としては次のものがある。

「クランタンの一農村におけるタバコ耕作の導入と社会・経済的变化」『東南アジア研究』9巻4号、1972. 3; 「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10巻1号、1972. 6; 「マレーシア東海岸の天水田地域における稲作——カンボン・ガロにおけるケース・スタディ——」『東南アジア研究』10巻2号、1972. 9; 「東海岸マレー農民における結婚と離婚」『東南アジア研究』10巻3号、1972. 12; 「マレーシア東海岸の村落住民の収入と収入源——カンボン・ガロにおけるケース・スタディ——」『東南アジア研究』10巻4号、1973. 3; 「クランタンの農村におけるポンド(寄宿宗教塾)」『東南アジア研究』11巻2号、1973. 9。

2) KBは町に連続した集落であり、その一部分はKBに含まれると同時にバシルマスの町域にも含まれると考えられている。ここでは町の領域に含まれる部分を調査範囲から除いている。

ることによって、クランタンのマレー農民の一般的特徴を見出すことを試みる。

1 生 業 と 収 入

1. 生 業 構 造

町に近いことは生計の源を町に依存する者の存在を増加させる。パシルマスの町は、商業と政府の諸サービスを中心として成立しており、小さな修理工場を除けば工場は存在しない。このことは、KB居住者の収入源が町に依存した場合、主として商業・サービス部門に関連することを必然的にする。図1は、KBおよびGの集落の世帯成員が従事する仕事(または収入源)の種類別に従事率(従事者を含む世帯/全世帯)を示したものであって、Gにおける従事者に対してKBにおける従事者の比が高いものから順に配列されている。町に近い集落の特徴として、輪タク、菓子づくり、大工、職人、理髪、美容、通年の雇用労働、野菜づくりなどに従事するものが多くなることが分かる(比の値が2.0以上)。これに対して、牛・水牛の売却、季節的雇用労働、ゴム園貸出し、ゴムタッピング、やし糖づくり、ローラー貸貸し、果実売却、出稼ぎ、タバコ耕作などは町から遠いG集落の特徴を形成する(比の値が0.5以下)。対人的な内容をもつ収入源がKBを特徴づけるのに対して、栽培作物に直接に関係する収入源がGを特徴

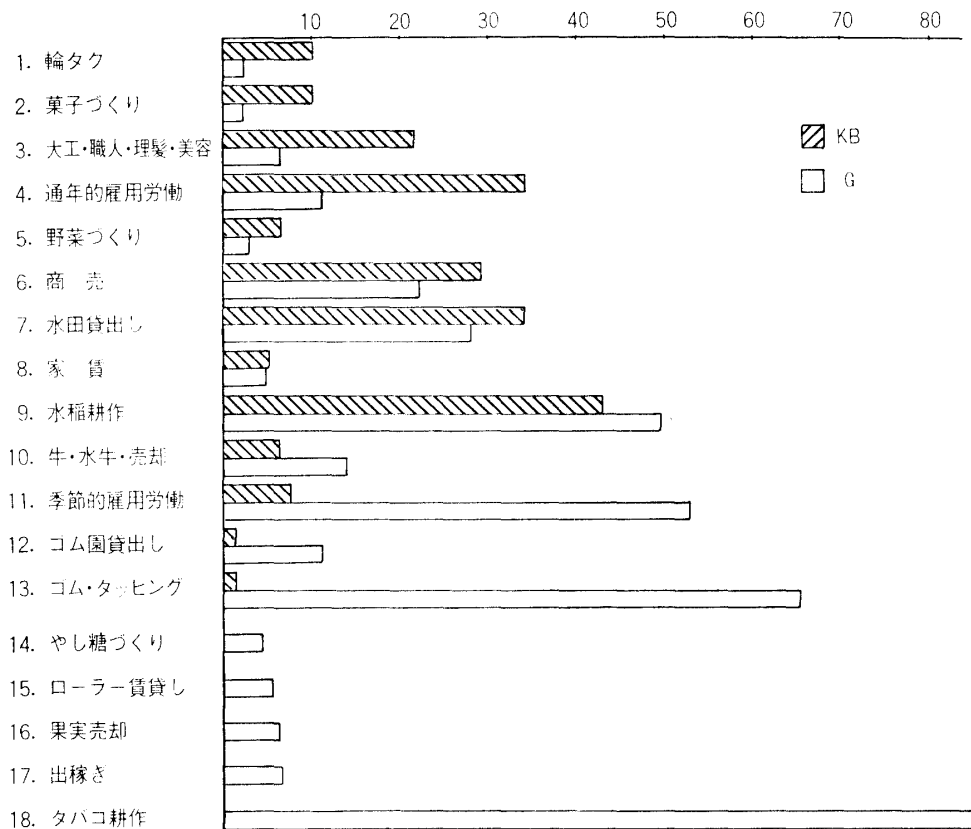


図 1 生 業 別 従 事 世 帯 率*

* 従事者を含む世帯/全世帯、ただしKBまたはGにおいて従事率3%以上のものだけを示す。

づけている。³⁾ 商売、水田貸出し、家賃、水稻耕作などはKBとGとの間に決定的な従事率の差が認められない生業（または収入源）である（比の値0.87～1.30）。

図2はKBおよびGにおける総収入のうち、それぞれの収入源がどのくらいを占めるかを示す。図1の場合と同様KBにおける総収入に対する割合とGにおける総収入に対する割合との比を計算し、KBの比の値が大きい順に配列してある。輪タク運転手、大工、職人、理髪、美容、通年的雇用労働は、上に述べたようにKBの特徴を最も顕著に示す収入群であるが、これら三者の合計はKBの全収入の52%を占めている。

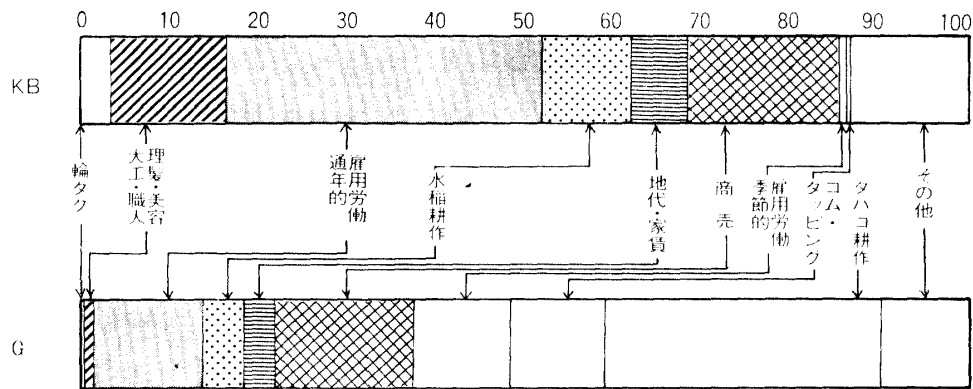


図2 総収入に対する収入源別収入の割合

上述のことがらから明らかなように、KBにおいては生産手段としての土地はGにおけるほど重要ではない。Gにおいては全世帯中生産用の土地（水田とゴム園）を全く所有しない者の割合は18.5%であるが、KBにおいては34.6%に達している。

クランタン州においては、他の州と同様に農民の生活は比較的早くから自給自足のとざされた構造を失っていた。町から遠いむらGにおいても、80年前にむらが開かれてから間もなく、農民自身によって小規模なゴム園がひらかれ、農民達は貨幣経済の中で生活するのに馴れている。町に近いむらにおける生活の変化はこの意味では、町に遠いむらの生活との関連において連続的である。西海岸の多くの州とは異なり、クランタン州では華僑の流入が少なく、マレー人自身が商業活動に参加する機会が多い。

2. 世帯収入と生活水準

上に述べた生業構造の相違は両集落における世帯収入の較差をもたらす。図3はKBとGにおける年間世帯収入の分布を示すが、GにおいてはM\$ 999以下の世帯が54%を占めるのに対して、KBにおいては最頻値（37%）がM\$ 1,000～1,999の層に現われる。またGにおいてはM\$ 5,000以上の年収を得るものは皆無であるが、KBにおいてはM\$ 5,000以上の高収入世帯が全体の6%を占めている。かくして、Gの平均世帯収入M\$ 1,076に対してKBのそれ

3) Gにおける季節的雇用労働はタバコ・シーズンにおけるタバコの葉の処理を中心とする労働や水稻耕作のための賃労働を、出稼ぎは主としてジャングル地域におけるゴム・タッピングをその内容としている。

は M\$ 1,963 と1.8倍になっている。またGの世帯収入中央値 M\$ 936 に対して, KBのそれは M\$ 1,520 で1.6倍である。

世帯収入の差を背景として, 近代的な家庭用品に関する普及率の差がKBとGの間に明確となる。図4はKBとGにおける若干の品目に関する普及率を, KBにおいて高率を示したものから順に示したものである。すべての品目に関してKBの値が高い値を示すが, 各品目に関する普及率の順序に関してはKBとGは同様の傾向を示さない。タバコ耕作における運搬目的に用いるため近時自転車が増加したことと, 電気の供給がないために扇風機が用いられないことがGにおける順序をKBのそれと異なったものとするために最も大きな役割を果たしている。

家屋もまたKBにおいてGにおけるよりも立派なものが多くなる。床面積に関しては, 図5に示されるように基本的な大きさの相違は認められないのであるが, 図6に明らかなように建築にかけられた費用ははるかに大きい。これは良材の使用, 側壁用に竹を用いず木材を用いるようになること, 窓枠, 扉, 天井の完備, コンクリート製基石の使用, コンクリート製階段の付設などを通して家屋の機能と外観が向上することと結びついている。かくして, Gにおける平均建築費 M\$ 1,015 は平均年収の0.94倍であるのに対して, KBの平均建築費 M\$ 2,925 は年収の1.49倍となっている。

3. 稲作

水稻耕作はKBにおいてもGにおいても営まれているが, その内容を検討すると両者の間には若干の類似点と同時に, かなりの相違点が認められる。水稻耕作が小規模な水田所有 (KB

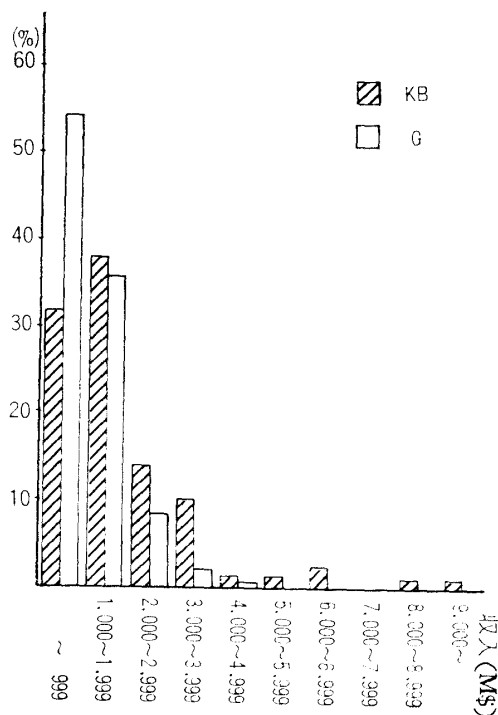


図3 世帯収入の分布

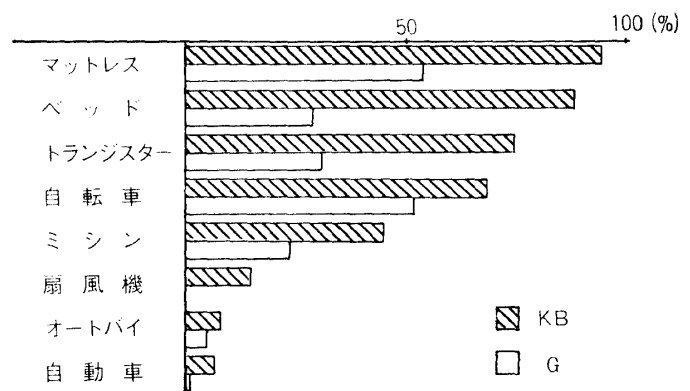


図4 家庭用品普及率

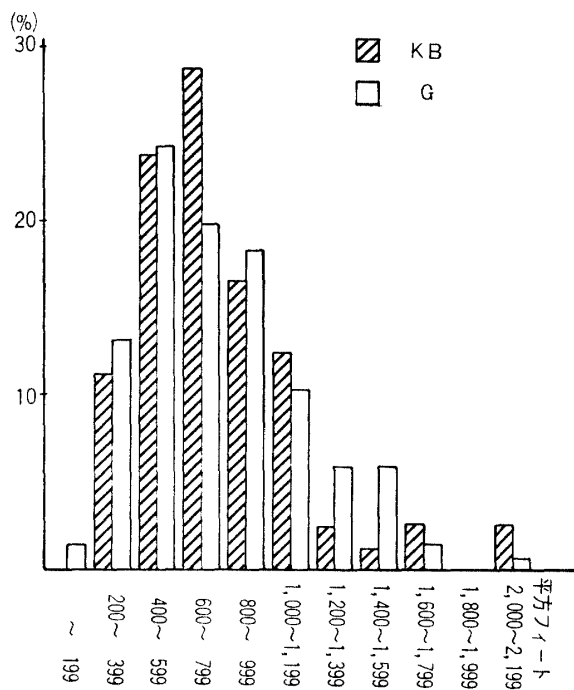


図 5 家屋の大きさ

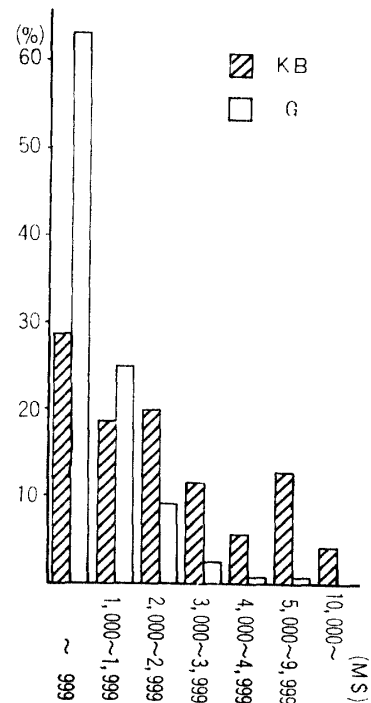


図 6 家屋の建築費

平均1.5エーカー，G平均1.2エーカー）を基礎として，自作に重点をおきながら家族労働を主体として行なわれるということが基本的な類似点であるが，町に近く，またより良好なかんがい条件をもつKBにおいてはGにくらべると以下のような相違点が認められる。

第1に，水田所有者と耕作者との比が低下する。水田所有者を100とした場合，Gでは耕作者数は66であるのに対して，KBでは58となる。

第2に，上述の事実に関連して，土地を貸し出す者がKBにおいて多く，従って小作者の割合が増加する。ちなみに小作のみによって耕作を行なっている者は，KBにおいて稲作農家の20%，Gにおいては8%である。

第3に，KBでは二期作化がかなり行なわれ，総水田耕作面積47エーカー中32エーカー（79%）が二期作田である。

第4に，二期作化にともなってKBでは政府が推奨する新品種（Mahsuri）が受け入れられており，全水田筆数のうち78%はこの品種を用いている。Gの場合新品種は全く用いられていない。

第5に，Gにおいては牛，水牛に依存して自力で本田耕起を行なうのが主な耕作形態であるが（61%），KBにおいてはトラクターを雇用することが主な形態となっている（70%）。

第6に，肥料の使用に関して，Gでは全農家のわずか30%が化学肥料を使用するのに対してKBでは例外なく化学肥料を使用している。1エーカーあたりの投入量もGでは肥料使用農家だけについてみても1.6袋にすぎないがKBでは2.6袋を用いている。⁴⁾

4) 農務局の推奨する量は1エーカーあたり3袋である。

第7に、上述の条件の相違を反映して、単位面積あたりの収量の相違がみられる。Gでは、通常の収穫の場合309ガンタン／エーカーが期待されており、1970／71年度の実際の収穫は220ガンタン／エーカーであった。KBでは二期作田においては1年あたり970ガンタン／エーカー、一期作田においては502ガンタン／エーカーが収穫されている。⁵⁾

以上の相違をふまえて総合的な相違が二つの集落の間にみられる。Gでは米は自家消費に用いるものとされているのに対して、KBでは、米は換金作物としての性格をかなり強く有しているのである。この傾向はKBがGに比してクランタン川のより下流部に位置し、よりよい水条件の下で、最初から商品作物として米を栽培してきたことと関係している。町に近いことは元来KBにあった商品作物としての水稻耕作をますます助長したと言える。Gにおいては収穫に際して近隣や親族を雇用することがKBにおけるよりも多い。このような雇用は必ずしも一定の労働に対して一定の賃金を支払うという性質のものではなく、手伝ってくれた者に収穫の中から心もちの謝礼をし、手伝った者は受け取ったもみ米を自家消費に用いるという相互扶助的な要素を含んでいる。KBではこのような意味での雇用がみられなくなり、労働は原則として家族労働によって行なうという傾向が現われると同時に、仮に雇用労働に依存する場合、それは完全な契約となってくる。

Ⅱ 家族生活

親の世帯が居住する家屋と子の世帯が居住する家屋とが同一の屋敷地に建てられ、これらの発展形態を含んだ親族近隣集団がマレー農民の生活にとって重要である。Gにおいてはこのような親族近隣が36グループ存在する。1グループ平均2.8世帯を含み、これらの環境の中で生活している世帯が全世帯中69.2%を占めている。KBにおいては20グループが認められ、1グループ平均2.3世帯を含み、56.8%の世帯がこの環境の中でくらしている。親族近隣集団に含まれぬ居住者がKBで若干多くなっていることに注意する必要がある。

夫婦を世帯構成の中心としつつも、家族の枠が強固ではなく、未婚の子の一部を排出することがある反面、同一家屋内に二組の夫婦を含めぬことを原則としてその他の付加成員を容易に受け入れる傾向があることが、Gにおいて認められている。⁶⁾ KBとGにおける世帯の家族構成を比較すると表1のようになり、欠如あるいは付加の要素をとまなわなない標準的なパターンに属する世帯の割合はGにおいて53%、KBにおいて58%であり、後者のほうがやや割合が高いが、その差は謹少である。このように世帯の家族構成の柔軟さに関しては両集落に関して類似性が認められる。付加成員を考慮に入れぬ場合、拡大家族的な形態を生み出すのはⅣおよびⅥのステージであるが、これらのステージに属する世帯の割合はGでは12.3%、KBでは21.0

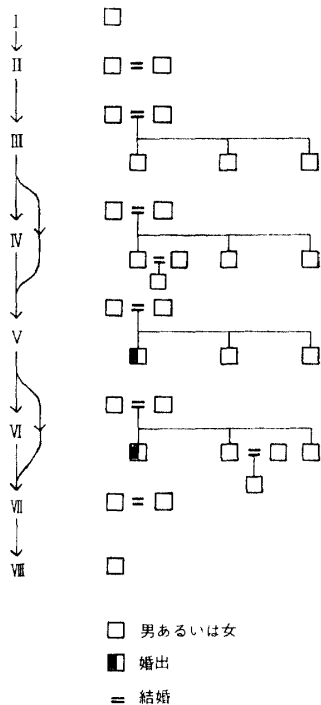
5) 1ガンタン(gantang)=1英ガロン

6) 拙稿「東海岸マレー農民における結婚と離婚」『東南アジア研究』10巻3号、1972、12。

表1 世帯の家族構成 KB(G)

家族のタイプ 構成	世帯 総数	通常態	欠如成員			付加成員			成員		
			夫婦の 未婚子	配偶者の 未婚子	配偶者	配偶者の 未婚子	養取	親	離の 婚娘	孫	傍系親
I	(3)	(2)					(1)				
II	(6)	(3)	(1)				(2)				(1)
III	26(59)	21(41)	2(7)	(10)	(2)	1(6)	3				
IV	5(0)	4		1							
V	24(30)	8(12)	(1)	(1)	3(4)	5(4)	3	2(1)	2(5)	7(12)	
VI	12(18)	7(5)			5(10)		2	1		(7)	
VII	6(14)	2(6)					2(3)		(1)	2(5)	(1)
VIII	8(16)	5(8)					(1)		2	3(7)	
計	81(146)	47(77)	2(9)	1(11)	8(16)	6(10)	10(7)	3(1)	4(6)	12(31)	(2)

注) 複婚ケースは夫を2回数えることによって2世帯に分離した。



単に独立することを示唆している。

図7は初婚年齢の年齢別分布の累積を示したものであるが、Gの女子においてはより若い年齢から結婚がはじまり15才において半数の者が結婚しおわって

%である。標準的な家族形態をとるもののみについてみると、拡大家族の形態をもつ世帯の割合はGでは6%であるのに対してKBでは23%となっている。一般の常識とは逆に一種の拡大家族化が町に近いKBにおいて認められるのである。この理由の一部は既に述べた家屋の建築費の相違に求められそうである。Gにおいては、M\$200未満の家屋に居住する者が16.4%も存在する。また、ステージIVは未だ婚出した子をもたぬ世帯において、いずれかの子がはじめて結婚し親と同居する場合に現われるのであるが、このステージに属する世帯はKBのみに存在し、Gにはみられない。これらのことは、Gでは結婚した子が少なくとも家屋に関する限り簡

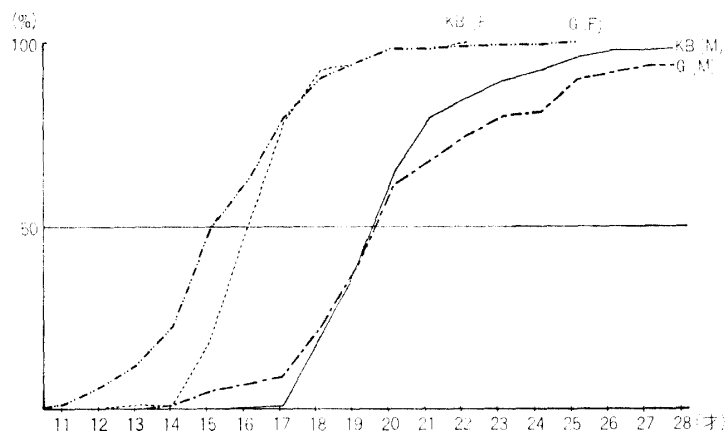


図7 年齢別にみた結婚経験*
* 初婚年齢別にみた結婚経験者の割合の累積値(男女別結婚経験者=100)

いる。KBにおいては半数の者が結婚しおわるのは16才においてである。しかし、17才で80%、18才で90%が結婚しているという状態に関しては両集落間に差異はない。男子の結婚年齢についてもGにおいて早いスタートがみられるが、20才を過ぎると結婚状態にある者の割合は逆にKBにおいて高くなる。KBにおいてはごく低い年齢における結婚は阻止されるようになるが、Gと共通する特定年齢までに結婚しおわるという傾向は維持されている。このような傾向は後に述べる学校教育の普及とある程度関連するかもしれない。

結婚に際して支払われる結納金 (*belanja*) の額は最近10カ年の結婚においてGでは平均M\$ 229, KBではM\$ 319であった。Gの場合平均年収の21%, KBの場合平均年収の16%にあたる。絶対額の上昇はみられるが実際の負担率はKBのほうが軽いといえる。結婚にともなう儀礼もKBにおけるほうがGにおけるよりもより複雑、豪華となる。

KBとGにおける結婚経験者の結婚経験回数は図8に示す通りである。再婚経験者の多いことが目立つがこれは同図に示された結婚経験者の離婚経験回数と密接に関連している。KBにおいて離婚がより少ないことが認められるがとくに目立つのは何度も離婚をくり返す者がKB

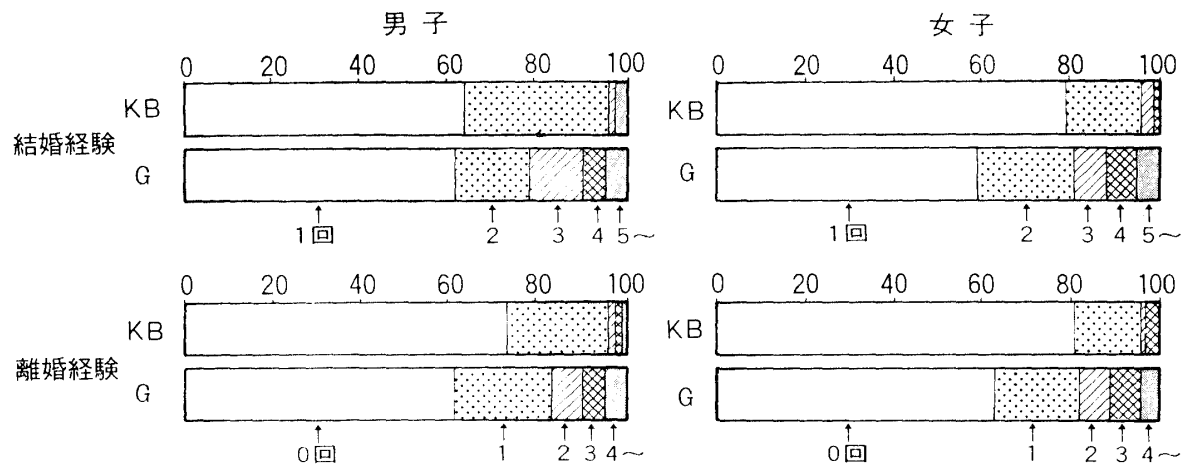


図8 結婚経験回数および離婚経験回数別にみた結婚経験者(百分率)

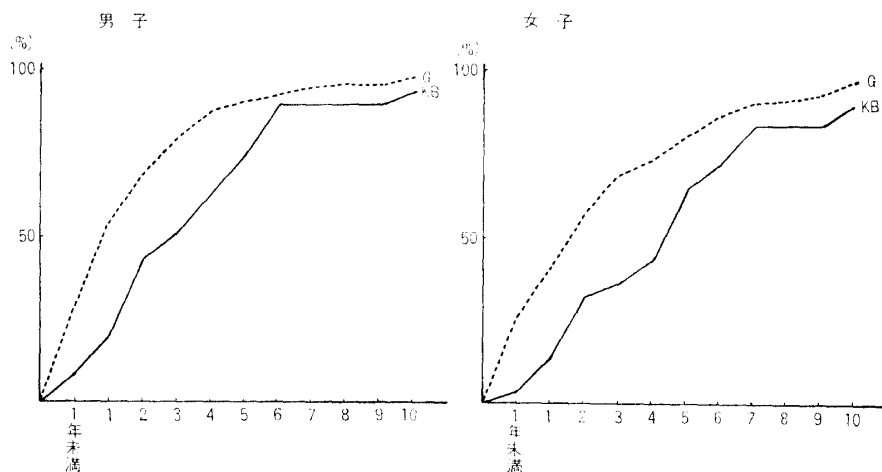


図9 結婚から離婚までの期間(累積率)

においては著しく少ないことである。離婚までの婚姻継続期間に関しては図9に示すように両集落の共通点は離婚の8割ないし9割が結婚後6, 7年までに生じていることである。しかし、Gにおいては短期間における離婚発生の傾向がより著しく1年ぐらいのうちに生ずる離婚が全離婚の40~50%を占めているが、KBではこの傾向はかなり緩和されている。結婚経験者における離婚経験者の割合を年齢階級別にみると図10のようになり、40代男子を除けばすべての年齢層にわたってKBのほうが低い割合を示す。とくに20代における離婚経験者はKBにおいて著しく少ないことが分かる。

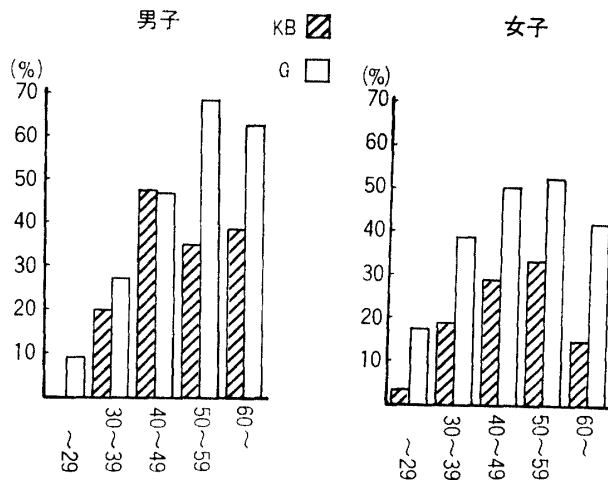


図10 年齢階級別にみた結婚経験者における離婚経験者の割合

Ⅲ 教育と宗教

KBとGにおける就学経験および識字率は図11および図12に示す通りである。GにおいてはKBよりはるかに遅れて小学校教育が普及したことが分かる。識字率についても同様の傾向が認められ、中年女子における例外を除けばKBは常にGよりも優位にたっている。15~19才の年齢階級について就学経験をさらに詳しく検討すると図13のようになる。この年齢階級においてはKB、Gともに就学率がかなり高くなり、この意味で両集落間に決定的な差は存在しなくなっているのであるが、それでも非就学者の割合と中学校進学者の割合に注目するとき、二つの集落における教育に対する態度の差を明瞭に読みとることができる。就学経験、識字率に関する男女の差は二つの集落において常に存在している。小学校就学状況、識字率などに関する限りこのような男女較差は近年になるほど減少してくるのであるが、レベルをあげて中等教育の受容状態をみると較差

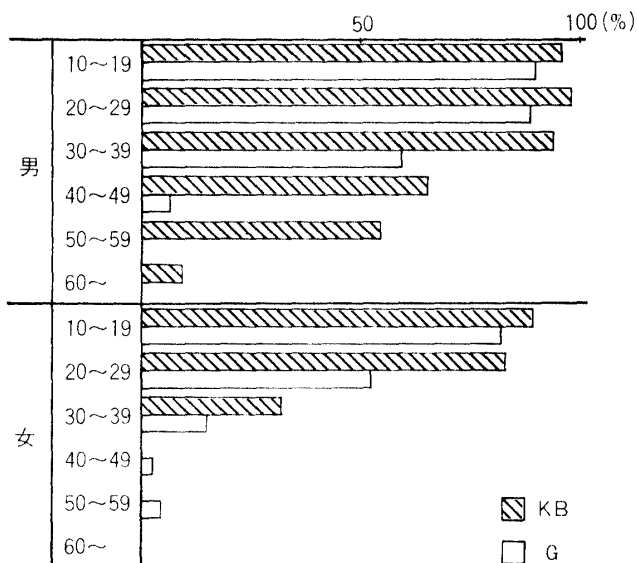


図11 年齢階級別にみた就学経験

はKB、Gともに就学率がかなり高くなり、この意味で両集落間に決定的な差は存在しなくなっているのであるが、それでも非就学者の割合と中学校進学者の割合に注目するとき、二つの集落における教育に対する態度の差を明瞭に読みとることができる。就学経験、識字率に関する男女の差は二つの集落において常に存在している。小学校就学状況、識字率などに関する限りこのような男女較差は近年になるほど減少してくるのであるが、レベルをあげて中等教育の受容状態をみると較差

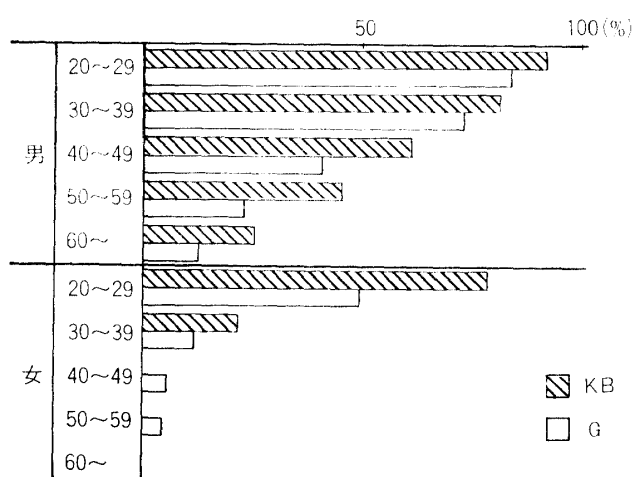


図 12 年齢階級別にみた識字率

は依然として維持されていることが分かる。

学校教育の普及は、伝統的なポンド (*pondok*, 寄宿宗教塾) の教育的役割を低下させていく。⁷⁾ KB, Gともに近くに一つのポンドをもつが、現在、少年にとってその役割は著しく少なくなっている。Gにおけるポンドは少年の代りに老人 (老女) が増加して老人ホーム的な存在となっている。KBのそれは老人の数も増加しているが、同時

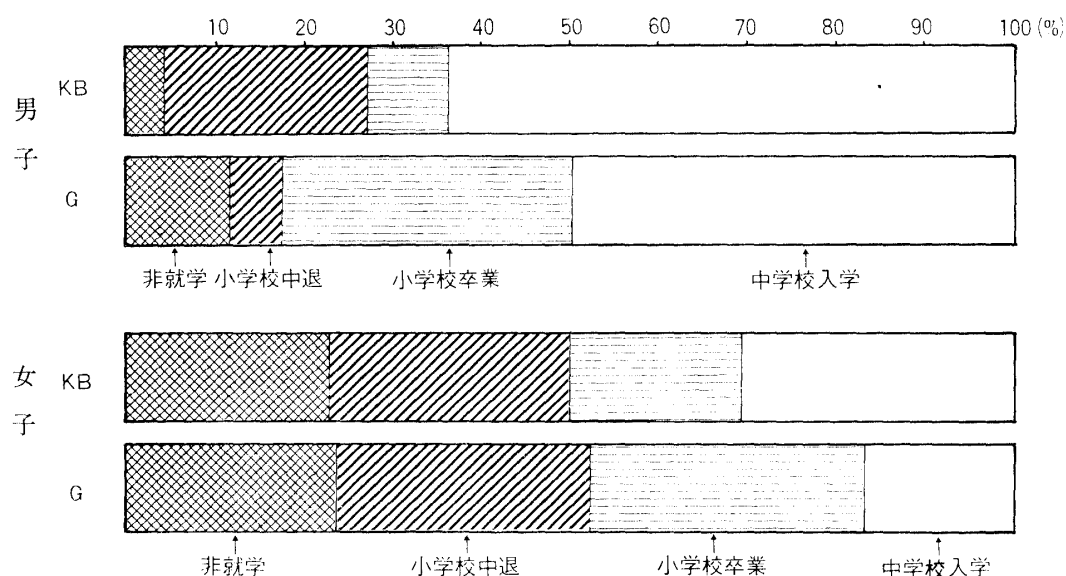


図 13 15~19才における就学状況

に町の学校に通う少年達が寄宿舎代りに利用しているので、変化の程度はGのそれよりも小さいように見える。またKBのポンドの宗教教師 (グル) は比較的高名であって、週1度の宗教講話に際しては若者を含むかなりの聴衆を集めている。

町の近くに居住することは宗教活動がある意味で強化する側面をも有している。KBのモスクはGにおけるモスクよりも立派であるし、断食月にはよりよい食事がモスクで提供される。断食明けには7人の者がひと組となって犠牲の家畜をほふり、その肉を分配するが、このようなグループの形成はKBにおいてより盛んである。メッカ巡礼者 (ハジ) の数をとってみても、

7) ポンドに関しては拙稿「クランタンの農村におけるポンド (寄宿宗教塾)」『東南アジア研究』11巻2号, 1973. 9. を参照されたい。

Gにおけるハジの数は4名（男1，女3，20才以上人口の1.3％）に過ぎないのに対してKBでは14名（男9，女5，20才以上人口の7.1％）を数える。しかもこの中には2回巡礼した者を2名含んでいる。

Ⅳ 単純生活のマレー人と洗練されたマレー人

町に近いむらにおいては町の影響を受けることが著しくなることは当然である。町の影響を受けることは村落の変化として捉えられるが、ここで大都市から村落に至る一元的な都鄙連続体を想定することには問題があるように思われる。大都市が伝統から自由なコスモポリタンな世界として捉えられるとするならば、村落住民のフレーム・オブ・レファレンスはこのような性格をもつ都市に関連して形成されているのではない。金銭、技術の側面において大都市の要素は町を経て村落に入りこむ。他方これらの金銭、技術を使用できる村人はマレー人にとって伝統的に価値あるものと考えられるものを実現しようとする。伝統的な社会においてみだされず、めぐまれぬ部分として位置づけられてきた農民（peasants）は、以前には到底望むべくもなかった伝統的地方都市の上流階層（象徴的には貴族的階級）の生活構成要素の一部を、建築儀礼、生活様式などを通して実現しようとするのである。しかしまた一方、大都市におけるホワイトカラー（特に官吏）の生活が現代社会において魅力ある存在となっていることは農民自らも気がついており、この傾向は町に近づくほど強くなる。かくして子供に対しては必ずしも伝統的な教育にこだわらず、近代的教育との接触をますます強めさせようとする。しかしながら、高等教育を受けたものは農村にとどまることがほとんどないので、実際に村落に居住する者にとってはこの社会は無縁の、あるいはせいぜい間接的な存在に過ぎない。

農民にとって何がフレーム・オブ・レファレンスとなるかを簡単に図式化すると図14のようになるかもしれない。単純かつ粗野な生活構造から洗練された複雑な様式をもつ生活構造への変化だけに注目すればこの変化は、マレー的なものをさらに拡大していくというイメージをうかびあがらせる。すなわちここでは近代化に応じて伝統化が同時に進行するという一見奇妙な並存が見られるのである。

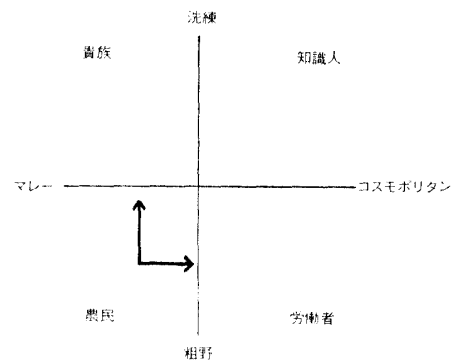


図 14 マレー農民生活の志向方向

真にマレー的なものとは何かを議論するとき、マレー的なもののモデルとされるのは伝統的地方都市上流階級の特長なのであって、一般の農民はマレー的要素を完備するにはあまりにも貧しく、単純かつ粗野な生活を送ってきた。このような農民を文化的に「未完の状態」として捉えることも可能であるが、むしろ単純な形を本質とする一つの完成体と認めることのほうが

重要であるように思われる。マレー人におけるきわめて高い離婚傾向が発現してきたのは、このような単純な生活状態における農民間においてである。

クアラルンプール市内の Kampong Bahru とよばれる マレー人居住地区の一区画と、クアラルンプール近郊 Kuang における水稲およびゴムタッピングを生業とする農村との比較研究を行なった Provencher は、都市的環境における家主層の生活内容および行為様式が、マレー的な文化との関係において最も洗練されたセットを構成していることを明らかにしている。⁸⁾ この場合、Kampong Bahru はコスモポリタンな性格を強く有する官吏や知識人の居住地区とは異なった存在であることに注意する必要がある。Kampong Bahru で認められた特性は町に近いむらの中にも認められるのであって、マレー農民の変化の方向を暗示するようである。

町に近いことによってマレー的な生活がより強調される方法には二通り考えられる。従来の収入では実現されなかったものを増加した収入をさいて実現しようとする際の配分方法に関して、収入増加率以上が投入される場合と収入増加率以下が投入される場合とである。既に示してきたデータの中からは家屋建築費に対する配分は前者に、結納金に対する配分は後者に分類されよう。両者が逆になっているならば、町に近いマレー人の社会における儀礼化が過度に強調されていることを疑いもなく論じ得るが事実はそのようではない。家屋は健全な生活のための基礎であって、Gにおける一部の家屋は熱帯的環境下といえども雨露をしのぐに必ずしも十分とは言えない程度である。KBにおいて家屋に投入される金額は必ずしも過度とは言えないように思われる。かくして、クランタンの農村における生活の変化は内にいくつかの対立要素をはらみつつも、概して平穏無事に進んでいるように思われる。

8) Ronald Provencher, *Two Malay Worlds: Interaction in Urban and Rural Settings*, Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, 1971.